

# 雨月物語研究ノ一ト

——その一『白峯』の巻——

鵜 月 洋

- 一、はじめに
- 二、白峯の稱呼について
- 三、白峯寺と白峯陵について
- 四、みを坂の林にあつた西行庵について
- 五、志戸について
- 六、相模について
- 七、おわりにかえて（参考圖錄解説）

## 一、はじめに

上田秋成の生涯は、いつてみれば流浪變轉の歴史であつたが、それにもかかわらず、彼の足跡はあまりさだかではない。大阪曾根崎で生まれ、四歳のとき堂島の商家に養子となり、紙油商島屋の若旦那として人となり、三十八歳にして火災で家をうしない、その後は一時長柄に移り、ふたたび大阪に戻り、さらに五十五歳の時には加島村に再度村居し、六十歳の夏には京都に轉居し、以後十六年間、京都市内を轉々と移り住み、ついに門人羽倉信美の邸で七十六歳の生涯を閉じるまで、秋成がこころみた旅行らしい

旅行といへば、四十六歳の折、妻とともに但馬城の崎の温泉に遊んだこと、四十九歳の初冬、友人とつれだつて奈良に遊んだこと、五十五歳の春、友人西河忠直と大和に杖ひいたこと、六十五歳の夏から秋にかけて、眼疾治療のため河内に滞在したことなどが、記録に残っているぐらいのもので、その他の蹤跡については、京畿の間を往來し、紀伊高野を訪れたこと以外には、ほとんど明確な記録や資料をのこしていない。とりわけ雨月物語で發表した四十三歳の安永五年（一七七六）以前に、雨月物語で舞臺にえらんだ讃岐の白峯、下總の眞間、備中の庭瀬・吉備津社、下野の富田などという遠隔の地に、みずから赴いたという記録はまったく見當らない。

記録がないからといつて、あたから行かなかつたときめつけてしまふわけにもいかないであらう。何となれば、たとえば同じ大阪町人出身の作家西鶴が一再ならず江戸に下つていたのであるから、時代や教養こそがえ、秋成も大阪町人のはしぐれであつてみれば、あるいは商用などで諸國を旅したこともあつたかもしれない、という考え方もできるからである。しかし、同じ臆測を

するのなら、秋成の性格や生活様式から推して、やはり彼は生涯を通じて近畿地方の一部を旅ただけで、けつして遠隔の地へは足を伸ばさなかつたであらう、と考えることの方が、より事實に近く、妥當なようである。すくなくとも私は、雨月物語という作品の中からは、秋成が讃岐や下總や備中や下野などへは行つたことがなかつた、という結論を導き出すことができると思つた。そして、この五月に、思いきつて雨月物語の舞臺を實際に歩いてみて、その直感をはつきりとした確信にまで深めたのである。

雨月物語は、時代小説であり、翻案小説である。時代小説であり翻案小説であるということは、作品のリアリティが現實そのもののリアリティを再現することではなく、古典的リアリティによつて統一されるということである。題材はもちろん、作品で設定する舞臺や場は、作者自身の直接的觀照・經驗的現實の外にあつて、しかも古典的現實の中になければならないというのがそこに共通した條件である。行つたこともない土地、見たこともない場所を、古典や文獻から具體的な知識として吸収攝取し、その知識を作者の内部でどのように編成しなおし、どのように感性的な處理をするかということで、はじめて時代小説・歴史小説・翻案小説の文藝性が決定されるのである。雨月物語はまさにその典型であつた。『白峯』でみせたあの精彩な描寫、『吉備津の釜』や『青頭巾』でみせたあの悽慘な描寫、といちいち數えあげるまでもなく、それらは古典的知識がすぐれた詩人の頭腦の中で醗酵し醸成された結果の所産にはかならない。その一語一節はすこし丹念に調べればいずれも典據を指摘できるものであつた。

それにもかかわらず、そこに展開された迫真的な描寫や、そこに創造された強烈な藝術美は、完全に原典の羅網をふりすて、先行作品『奇異雜誌集』『御伽婢子』『狗張子』『怪談全書』『百物語』『續御伽婢子』『新御伽婢子』『新百物語』『英草紙』『繁野話』等々と、ほぼ同じような條件と制約のもとに發足しながら、そのうちのどれひとつにも見出すことのできない獨自な藝術の領域と美的範疇を創造開拓しているのである。文學を通じて古典的眞實を追求し、古典的眞實のなかに自己の眞實をうち出そうとした詩人秋成の純粹な魂と天眞は、その昇華のあまりの完全さに、ついに一人の後繼者をも許さなかつたが、その文學はわが國散文藝術史上において、まことにユニークな金字塔をうちたてたのである。

三年ほど前から私は雨月物語の註釋をはじめた。戦後十餘年、雨月物語の註釋書は十指にあまるほど出版されている。しかし、私が實際に手がけてみて驚いたことは、これら註釋書の大半が、たんなる言葉の言い替えに終始して、同時代の用語例や、秋成自身の語彙語法に案外無關心であり、作品と典據との結びつき方、いいかえれば作品と素材との距離と關聯の位相を究明することに割合に冷淡であり、さらに題材と舞臺の事實調査をほとんどないがしろにしているという點であつた。この穴を埋め、ここに強い照明をあてないかぎり、雨月物語の素顔はわからない。雨月物語の本質を追求し、正しい評價を下すためには、從來の研究方法に再檢討がくわえられてしかるべきであらう。

翻案小説・時代小説とよばれるかぎり、素材のリアリティは作者の側にその責を負わすべきではない——ということを十分承

知しながらも、私は何かやむにやまれぬ衝動のようなものから  
れて、單身、讃岐の白峯に赴き、備中の吉備津神社を訪れ、吉野  
から高野山に登つて、雨月物語の史跡遍歴ともいふべき旅を試み  
た。私には、秋成が精彩にリアルに描いてみせながらも、そのじ  
つ見てもいなかた場所、知りもしなかつた土地を、この目で實  
際に見、確めてみようとする稚氣があつた。意地悪い言い方をす  
れば、未知なるがゆゑに秋成がおかし、おちいつたであらう誤謬  
や錯亂をさがし出して、それが作品のリアリティをどの程度に  
削減し、作品の構成をどのように掣肘し、作品全體にどんなハン  
ディキャップをなし、はてはその文藝性をどのように左右してい  
るかをまで、みきわめたかつたのである。だから、たとえば芭蕉  
研究を志す人人が奥の細道の足跡をたどつて、芭蕉への懷舊と憧  
憬のうちに、復元的イメヱジをえがきながら實證的研究をすすめ  
るのとは、根本的にちがつていた。私の態度は、愚かしくもまた  
不通であつた。私の實地踏査は、穿鑿的であり、古典から冷酷に  
「文藝性」を剥ぎとるという暴舉もあえてなした。秋成のあずか  
りしらない雨月物語の出生以前の素姓を洗いたてようとした。お  
そらく秋成は、はじめこそばゆく、やがて苦笑し、ついには激怒  
したかもしれない。しかし、繰返していうが、雨月物語はしよせ  
ん譚案小説・時代小説・歴史小説としての宿命と制約をふりすて  
ることはできない。歴史性と譚案性を足場として、その上に組み  
上げられた作品であることを否定するわけにはいかない。——私  
が敢えてここに、疑問にみちみちた、そして結論をもたない、白  
峯の實地踏査報告を、雨月物語研究の基礎作業として發表するの

も、雨月物語ののつびきならない限界と宿命を、そうした點から  
追求するひとつの前提と鍵を提示しておきたいからである。

## 二、白峯の稱呼について

白峯は、正しくは「シロミネ」でなければならぬ。

應永十三年（一四〇六）孟秋二十五日の奥書のある『白峯寺縁  
起』は、現在白峯寺の寺寶として保存されているほか、群書類從に  
も覆刻され、『明治神佛分離史料』續編上巻や國文東方佛教叢書  
等にも翻刻されているから、披見するのに事缺かないが、その説  
くところにしたがえば、白峯寺は九世紀の初頭から中葉にかけて  
弘法・智證兩大師の開基といわれ、今日でも眞言宗仁和寺派に屬  
している。したがつて白峯の名稱も、佛教でいう五色にもとづく  
ものであつた。白峯の東北方に青峯・黒峯がそびえ、東南方には  
赤峯・黄峯があつて、これを五峯とも五色臺ともよんでいる。命  
名の由來からいつても、白峯は當然「シロミネ」でなければなら  
ない。それでも私は念のために、現地で逢う人ごとに訊ねてみた  
が、異口同音に「シロミネ」といつて、昔から「シラミネ」とは  
けつしてよばなかつたという答であつた。

それを、秋成は何にもとづいてわざわざ「シラミネ」と訓まし  
たのであろうか。雨月物語の推敲ぶりからみて「しらみね」の振  
假名が板下の誤寫とは思えない。秋成が『白峯』を構成する上に  
直接典據にしたとおもわれる諸書から、「シラミネ」の稱呼をさ  
がしてみたが容易には見當らない。たとえば『保元物語』の版本  
であるが、元祿六年刊の『参考保元物語』には「白峯」とだけあ

つて、よみがなが附されていない。繪入平假名の『新編入平元物語』には「しろみね」とある。その他、慶長活字本、寛永整版本等々をひもといてみても、たんに「白峯」とあるか、あるいはあきらかに「シロミネ」と訓ましているかである。また『源平盛衰記』でも、たとえば片假名本には「白峯」とだけあつて、よみがなが附されていないが、慶長活字本には「白峯」、元禄十四年刊の積本には「白みね」とあり、その他の諸本にも「シラミネ」の訓は見當らない。『撰集抄』も慶長三年版には「シロミネ」のふりがながほとんどこされている。『西行四季物語』も「白峯」と訓んでいる。謡曲の『松山天狗』にも「白峯と申す高山なり」「あの白峯の相模坊」「あれあれ見よや白峯の」「白峯に住んで年を経る」「明け行く空も白峯の」と、しばしば「白峯」の語が出てくるが、いずれの場合も「シロミネ」と訓み、語っている。『山家集』にも「よしやきみむかしのたまのゆかとても」の歌の詞書に「しろみねと申しける所に御はかの侍りけるにまありて」とあり、『西行法師家集』にも同じ歌の詞書に「しろみねと申す所にて云々」とある。その他、後世の『和訓栞』や『金民羅參詣名所圖會』等にも「しろみね」とある。

こうして次々に反證をならべたててみると、秋成がなぜ「シラミネ」の訓をとつたか、ますます不可解である。憶測すれば、何かのはずみでそう思いこんでいたのが不用意に出た、と解することもある。享保十年刊の『合類大節用集』乾坤の「白」の部に出てくる個有名詞が「白山、白川關、白鬼女川」とすべて「シラ」と訓じているように、それが當時のよみぐせであつたので、無條

件でそれにしたがつたと解することもできる。また悪本であるが貞享四年刊の繪入『西行撰集抄』でも座右において、それに「白峯」とあるのに據つたのもあろうか。あるいは少し大げさな考え方をすれば、後年國語學上に一家の見識を披露した秋成のことであるから、「シラミネ」と訓むには訓むだけの何か學問的根據のようなものでも脳裡に藏していたのであろうか。——私にはいまだそれを釋くすべがない。

ただ、なぜ秋成があえて誤謬をおかしたのであろうかと小首をかしげながら、白峯も白峯陵もしらなかつた秋成の、そして歴史小説『白峯』の、第一のハンディキャップを——こんな些細な點から指摘しはじめてよいであらうかと、いささか逡巡しながら——そつと數えあげてみるのである。

### 三、白峯寺と白峯陵について

讃岐國綾歌郡にある白峯寺、くわしくは香川縣綾歌郡松山村青海（昭和三十一年七月一日）にある綾松山洞林院（別名千手院）が、歴史の上にクローズアップされたのは、開基以後三世紀を経た長寛二年（一一六四）八月二十六日、四十六歳をもつて、讃岐國府中（現在は坂出市）の鼓岡木丸殿で崩御された崇徳院の遺骸を、寺内西北隅の兒が嶽とよばれる絶壁の上で茶毗に附し、そこに御陵をきざしたことにはじまる。

西行法師が四國へ渡つて白峯陵に詣でたのは、それから三四年後であつた。秋成は『白峯』で「仁安三年の秋は……行／＼讃岐の眞尾坂の林といふにしばらく節を植む……この里かき白峰とい

ふ所にこそ、新院あらたにんの陵ありと聞て、拜かみみたてまつらばやと、十月はじめつかたかの山に登のぼる」と、西行の白峯しらね詣よを「仁安三年十月」のこととしている。しかしこの時期については從來も諸説あつて詳かにしない。六家集本の『山家集』の中には「そのかみ心ざし仕うまつりけるならひに世を遁のがれて後も賀茂に参りけり、年高くなりて四國の方修行しけるに又歸りまゐらぬ事もやとて仁安二年十月十日の夜参りて幣はにまゐらせけり云々」とあつて、仁安二年十月十日賀茂社へ詣でて、それから四國へ向つたことになつてゐるものもあるが、その他の『山家集』の諸本や『西行法師家集』では「仁安三年十月十日」となつており、『保元物語』の諸本も、岡崎本に「仁安二年」とあるのを除いては、いずれも「仁安三年の冬の比」と明記してゐる。

『世間差形氣』の卷末廣告で「西行はなし歌枕染風呂敷 近刻」を豫告して、西行に對する關心と造詣を暗示してゐる秋成のことであるから、むろん西行關係の文獻はかなり涉獵したことであらう。「仁安三年十月」としたのもそれ相當の根據があつてのことであらうから、この點に關するかぎり、『撰集抄』の「過にし仁安の比」、「源平盛衰記」の諸本こそつて記す「仁安二年の冬の比」、「白峯寺緣起」の「仁安元年神無月のころ西行法師四國修行の時」などの説をとらず、『保元物語』や『山家集』の説にしたがつたとみてよからう。

『白峯』は、その情景を次のようにえがいてゐる。  
松栢まつくわは奥おくふかく茂さかりあひて、青雲あまのうみの輕霧かろい日すら小雨こさめをそぶる  
がごとし、兒こが嶽たけといふ峻たけなしき嶽背たけせに簞たてだちて、千仞せんの谷底

より雲霧くもきりおひのぼれば、咫尺もろさきをも鬱悵ふさふさこゝちせらる、木立こだちわづかに間たる所に、土墩つちかく積たるが上に、石を三かきね疊かさねみ  
なしたるが、荆棘きせき薛蘿せつらにうづもれてうらがなしきを、これならん御墓みはにやと心もかきくらまされて、さらに夢現ゆめげんをもわきがたし……思ひぎや麋鹿みづかのかよふ跡のみ見えて、詣よつかふる人もなき深山ふかやまの荆きりの下に神がくれ給はんとは……終夜しゅうや供養くやうしたてまつらばやと、御墓みはの前のたひらなる石の上に座をしめて、經文きやうもん徐ゆるに誦よみしつゝも、かつ哥うたよみたてまつる……

最近、後藤丹治氏が『雨月物語』の諸典據（立命館文學、一九五六年三月號所收）において、『白峯』の典據として『白峯寺緣起』を再檢討され、それを實證されたが、私はここで逆に『白峯寺緣起』のおかしてゐる致命的な誤りを指摘するとともに、その點に關する秋成の史的な正確さと描寫の的確さを稱揚してみたいとおもう。

『白峯寺緣起』は、崇徳院の崩御後、「國府の御所を近習者なりし遠江阿闍梨章實當時に渡て頓證寺を建立して御菩提をとふらひたてまつる仁安元年神無月のころ西行法師四國修行の時彼廟院にまうて、笈あしをは庭上の橋の木に寄掛て法施ほふせたてまつりけるに御廟震動して御製にいほく松山やなみになかれてこしふねのやかてむなししく成にけるかな 西行涙をなかして御返事に よしや君むかしの玉のゆかとてもかゝらんのちはなにゝかはせん」と申たりければ御納受もやありけむたひ／＼鳴動したりけるとなむ」と記してゐる。この文章によると、西行が詣でたのは「廟院」であり、西行の法施に感應して「震動」し「鳴動」したのは「御廟」とい

うことになつてゐる。こゝでいう廟院・御廟が、正しい意味のみたまやか、あるいは『讃州府志』で「崇徳帝廟所報其像之宮曰頓證世俗誤認以陵爲廟（崇徳帝の廟、その像を報ずる所の宮は頓證という、世俗誤認し、陵を以て廟となす）と指摘するように、墳墓を誤つて廟とよんだものか、ただちには判断しかねるが、文脈からいえば、「廟院」は頓證寺をさしているかと解すべきであらう。

しかし『白峯寺縁起』が準據したとおもわれる『保元物語』『源平盛衰記』『撰集抄』等には頓證寺殿の存在はまつたく記録されていない。このくだりに關する諸書の記述をあげてみると、

仁安三年の冬の比、西行法師諸國修行の次に、白峯の御墓に參りて、つくづくと見まゐらせ、昔の御事思ひ出で奉りて

（保元物語）

去ぬる仁安二年の冬の比、諸國修行しけるが……讃岐國へ入りて松山の津と云ふ所に行きぬ、こゝは新院流されてわたらせ給ひける所ぞかしと思ひ出し……御墓はいづくぞと問ひければ、白峯と云ふ山寺と聞て尋ね参りたりけるに、あやしの下蔵の墓よりは猶草繁し、……暫くこゝに候ひけれども、法華三昧つとむる住持の僧もなく、焼香散華を奉る參詣の者もなかりけり（源平盛衰記）

新院の御墓所を拜み奉らむとて、白峯といふ所に尋ね参り侍りしに、松の一群しげれるほとりに、くぎぬきしまはしたり、是なむ御墓にやと、今更かきくらされて、物も覺えず（撰集抄）

いずれも西行がこゝに詣でた當時の墳墓の荒廢したさまをえが

いているだけで、廟院頓證寺殿が建立されていたような記事はどこにもない。というよりは、墳墓の荒蕪からは、菩提のための頓證寺がまだ建立されていなかった事實を推量するのが當然であり至當であらう。白峯寺の寺傳はこれを裏書きするように、頓證寺殿の建立をすくなくとも建久二年以後（一一九一以後）のこととしている。しかも當初は、たんに法華堂とよばれていたらしく、それが正式に頓證寺殿と號されるようになったのは、後小松帝の宸筆と傳えられる「頓證寺」の勅額がこの寺に下賜された應永年間（一三九四〜一四二八）の前後からであらう、と傳えている。

その頃が白峯寺全山の全盛期であつた。今日白峯寺にのこされている古圖をみると、二十一寺院がたちならび、頓證寺殿——當時は本地垂迹で、御本社とも稱された——は、現在と同じ御陵の南側の位置に、現在のように南向きではなく、御陵と同じように西向きに建てられていたことがわかる。その後二百年間の盛衰のことはつまびらかにしないが、近世になり、水戸の頼房の長子、光圀の實兄、松平頼重が高松十二萬石に封ぜられた寛永末年には御陵も寺院もかなり荒れはてていたことが『高松藩記』などに記されている。頼重は寛永十九・二十年（一六四二・三）にわたつて、その大改修をおこない、さらにその後三十餘年を経た延寶七・八年（一六七九・八〇）には、頼重・頼常が頓證寺殿など四字を再建したのであるから、秋成が『白峯』を書いた頃には、御陵の横に現在のような頓證寺殿が整備された状態で建つていたわけである。

加えるに、寶曆十三年（一七六三）には藩主頼恭によつて崇徳

院六百年祭がいとなまれ、時代もようやく國學の興隆期をむかえて、識者の關心がこの方面に寄せられることもあつたであらうから、たとえ秋成が直接に白峯の地を踏まなくても、白峯に關する記録や資料や傳聞には事缺かなかつたであらう。そうした情況のもとに身をおきながらも、秋成は白峯の「現狀」にまどわされることなく、また誤りやすい記録をたくみによりわけて、必要にして確な古典からだけ、西行の時代とその情景を紙上に復元・再現してみせたのである。實地踏査してみると、その點がじつにはつきりうなずけるのである。ここでもういちど『白峯』の描寫をふりかえてみよう。

十月はじめつつかたかの山に登る、松柏は奥ふかく茂りあひて青雲の輕靡日すら小雨そぼふるがごとし、兒が嶽といふ嶽しき嶽背に聳だちて、千仞の谷底より雲霧おひのぼれば、咫尺をも鬱悒こゝちせらる、木立わづかに間たる所に、土敏く積たるが上に、石を三かさねに疊みなしたるが、荆棘薜蘿にうつもれてうらがなしきを、これならん御墓にやと心もかきくらまされて、さらに夢現をもわきがたし、……思ひきや麋鹿のかよふ跡のみ見えて、詣つかふる人もなき深山の荊の下に神がくれ給はんとは……終夜供養したてまつらばやと、御墓の前のたひらなる石の上に座をしめて、……露いかばかり袂にふかゝりけん、日は没しほに、山深き夜のさま常ならぬ、石の牀木葉の衾いと寒く、神清骨冷て、物とはなしに凍じきこちせらる、月は出しかと、茂きが林は影をもらさねば、あやなき闇にうらぶれて……

今日でも、標高三百十米の高きにある白峯寺の周圍には一軒の人家もない。人里まで下るには約三軒のみちのりがある。全山深い木立におおわれて、まさに幽邃、畫なおくらく、空氣は濕氣をはらんで、寺院の建物をおおい、兒が嶽の百餘丈の絶壁を匍つてゐる。老松古杉蒼然たる中をひらいて御陵がある。御陵は近代の改修によつて、二重三重の石柵にかこまれ、咫尺することはできないが、腫をこらしてうかがえば、中央の柵内、木立のひまに、小高く土の盛りあがつた所がそれであり、雜草おおい繁つて凄寥の趣をたたえている。ここに立つて、私は『白峯』の描寫が、實に現象の表相のみにとどまらず、よくこの凄寥の情趣、荒涼の風致にまで及んでいることに、改めて感嘆した。そして次の瞬間には、秋成の筆が、この山陵の意味するもの、この墳墓の包藏する精神をまで形象化してえがき出していることに、深い感銘を覺えたのである。

#### 四、眞尾坂の西行庵について

『白峯』に「行／＼讃岐の眞尾坂の林といふにしばらく節を植む草枕はるけき旅路の勞にもあらで、觀念修行の便せし庵なりけり」とあるのは『撰集抄』の「西國はる／＼修業つかまつり侍りしついでに、讃州みは坂の林と云ふ所に暫く住み侍りき」に據つたのであらう。『讃州府志』にも、見を坂の林に西行が寓居した記事が載つてゐる。私がこのみを坂の林の西行庵跡をたずねてみる氣になつたのは、白峯へ登る前、善通寺の玉泉院と曼荼羅寺の水笠岡に西行庵跡をおとすれたので、ついでにみを坂の庵跡も見

ておこうという氣持もあつたが、それよりは、白峯寺で連日雨に降りこめられ、三日目の朝、小雨を縫つて下山する途中から雨が上がり、急に初夏のひざしが濡れた青葉を燦然とかがやかし、眼下に俯觀する雄山雌山、松が浦一帯が目もあざやかな晴色に變貌したのに、ついきそわれたからでもあつた。

みを坂の林については、從來あまり注意されていなかったようである。私の手許にある十數種の雨月物語註釋書を見ても、野田壽雄氏のそれをのぞいては、ほとんどが漠然とした説明しかしていない。ひどいものになると未詳、もしくはデタラメな説明でかたづけられている。それを訂す意味も含めて、ここに紹介しておきたい。

白峯を西方に下ると松山村宇高屋という部落である。ここから高松行のバスに乗る。バスは雄山雌山をみながら田圃の道をはしり、やがて鹽田の傍を通つて、海岸線沿いに北上し、東に廻つて西脇の港をすぎ、しばらく行くと坂道をのぼり、王越村役場前に着く。ここでバスをおりる。村役場のすぐ東隣、薬師堂とよばれる六坪ほどの小堂が、往時の西行庵の跡である。いまは堂内に薬師如來の石像を祀り、西行の像を安置してある。この場所は道路から一米ほど高い土地で、あきらかに林をきりひらいた跡をみせ、王越村字乃生と王越村字木澤の境界をなしている。そして昭和三十一年七月一日をもつて坂出市に編入されることになつてゐる。庵跡の前には西行腰掛松とよばれる老松が、かつては高く廣くそびえ、道をへだてた池の上にまで枝をはつていたということであるが、戦後枯れて、今は切株のみがわずかに往時のおもかげをしのばせている。庵跡の前の道は、右手西方に向つても、左手

東方に向つても下り坂である。庵跡の横には南北へ通ずる徑があり、北へ向つては下り坂、南へ向つては平坦な道が前の池の傍を通つてゐる。池のずうと向う側、すなわちここから南の正面には前山とよばれる山がそびえ、その尾根のあたりを鎌の双峠といひ、そこへ登る坂をいまでは水尾坂とかミゾオザカとか稱し、その邊を水落とよんでいるが、そのむかしみを坂といつたのはこの坂である。

ここに庵を結んだ西行が、どの道を通つて白峯へ詣でたかということになる、資料がなくて正確なことはわからない。ただわかつてゐることは、ここから西を廻つて南下する道、すなわち私が通つて來たバス道路は、近世以後にできた道であり、白峯寺所藏の中世古圖をみると、當時は白峯の西から西北へかけては海が入りこんでおり、雄山雌山の裾も波に洗われていたようであるから、もし西行がこの方面に道をとるとしたら、船を用いなければ行けなかつたはずである。また水尾坂をのぼり前山を越して青海へおりたとしても、當時の地勢から勘考すれば、白峯へ上るためにはどこかで船の助けをかりなければならなかつたであろうと思はれる。それにひきかえて、庵から約二軒東南によつた木澤の法印谷を越えて白峯へ出る道は、全行程三里ほどの山路であるが、白峯寺へ詣でる三つの參道の一つに當つてゐるから、この道をたどつた公算がもつとも大きいとおもわれる。

## 五、志戸について

讃岐に遷された崇徳院は、二度とふたたび都へかえる機會もあ



るまいとおもひ、ひたすら後世のためにと五部の大乘經を寫經し、せめてこれだけでも都の中へ入れたいと、弟である仁和寺貫主の覺性法親王の許へおくつたが、少納言信西の妨げにあひ、それもかなわず、つきかえされた。筆の跡さえも都へ納れないとはあまりである、と激怒した崇徳院の怨恨は深く、ついに復讐の鬼と化して、「此經を魔道に回向して、恨をはるかさんと、一すぢにおもひ定て、指を破り血をもて願文をうつし、經とともに志戸の海に沈て」のちは、深く閉じこもつて人にもあわなかつた、と秋成は『白峯』で叙述している。

さてここで、五部の大乘經と願文を沈めたのは「志戸の海」であるというが、秋成は何にもとずいて「志戸の海」としたのであらうか。『保元物語』では、京師本・杉原本・鎌倉本等に「海底ニ入サセ給云々」とあり、參考本に「千尋ノ底ニ沈メ給フ」とあつて、具體的にその場所を記したものはない。『源平盛衰記』には、五部の大乘經を以て三惡道になげこんだという記事はどの本にも見えてゐるが、それが志戸の海であつたということは全く記されていない。そうするとまず、經を海に投げこんだこと自體が怪しいのではないかということにもなつて来る。『大日本史』はその點を指摘して「按二書並云、沈經干海、然吉記壽永二年文云、上皇血書大乘經、傳在元性法印所、沈海之說恐誤」（按ずるに——二書「私註、保元物語ト源平盛衰記」並びう、經を海に沈むると、然れども吉記壽永二年の文にいう、上皇の血書せる大乘經は傳えて元性法印の所に在りと、海に沈むるの說は恐らく誤りならん——）としている。

しかし、あきらかに「シトの海」へ投げこんだと記しているものもある。『白峯寺緣起』と、それにもとずいたとおもわれる『山州名跡志』がそれである。『白峯寺緣起』には「小指をくひらせ給ひて五部大乘經の箱に龍宮城に納給へとあそはして椎途の海に浮させ給ひたりければ」とあり、正徳七年版の『山州名跡志』は「椎途といふ海底にしづめ玉ふ」といつている。「シド」は「シド」でも、ここは「椎途」「堆途」であり、『白峯』は「志戸」である。

秋成が「志戸の海」をもち出した直接のヒントは、むしろ『保元物語』『源平盛衰記』等が、上皇の崩御した所を志戸（志度）としていることにあつたと考へてよからう。まず『保元物語』をひらいてみよう。延慶本には「御歳四十六ト申シ長寛二年八月二十六日志度ノ道場ト申山寺ニテ終ニ崩御ナリニケリ」とあり、寛永の繪入整版本には「御年四十六にて志戸といふ所にてかくれさせ給ひけるを」とあり、參考本には「御歳四十六ニテ志度ト云所ニ隠サセ給ヒケルヲ」とあつて、その他の諸本もすべて「志戸」（又は志度）にしている。次に『源平盛衰記』をひらいてみよう。慶長活字本には「御年四十六にて志度と云ふ所にて終に崩れさせ給ひにけり」とあり、元祿版の繪入横本には「御年四十六にて、しどと云所にて、終にかくれさせ給ひにけり」とあつて、これも諸本こそつて「志戸」説をとつてゐる。『大日本史』は主としてこの二書にもとずいたのであるから、「崩于志度年四十六」（志度に崩ず、年四十六）としたのが當然であらう。この上皇崩御の地と記された「志度」（志戸）が、秋成に、五部の大乘經を投げこんだ

海を「志戸の海」と類推させたのであろう。いまはかりにそう考えておきたい。

それにしても、秋成は「志戸の海」を、いつたいどのつもりでいたのであろうか。従來の兩月物語註釋書はおしなべて、秋成の意嚮や史事におかまいたしに、志戸を屋島の東方約二里に位する香川縣大川郡志度町、すなわち志度寺と源平の合戦で名高く、後には平賀源内の生誕地として著名になつた志度町の海、志度灣であると頭からきめてしまつてゐる。これはひどい誤りである。

讃岐國（香川縣）のうちでも、坂出市の東部とその附近、具體的にいへばかつての綾歌郡松山村、林田村、加茂村、西庄村、府中村の一帯にかけては、崇徳院の遺跡と稱するものは多すぎるほど多い。とつさに思い出すだけでも、白峯陵以外に鼓岡御所の跡雲井御所の跡、長命寺、鼓岡神社、杜鵑家、菊家、鑑家、崇徳天皇社、姫塚、彌蘇場の泉（野澤井）、岩根櫻、高家神社、煙の宮、松が浦等々、史實傳説おりまぜて二十數ヶ所を數えることができるのであるが、それに反して、白峯より東方の地、たとえば高松市とか屋島とか志度町とかには、一つとして崇徳院の史跡を見出すことのできないのが實狀である。このことは、郷土人士の強烈な愛郷心を勘定にいれ、罪人としての崇徳院の制約された日常生活から推しはかつてみれば、ついに崇徳院の足跡が高松や志度に及んでいなかつた事實を裏書きするものであろう。ちなみにいへば、崇徳院の三年間の假御所であつた雲井御所や、その後六年間住まれた鼓岡御所から、志度町までは、八里近くもはなれてゐるのである。

上皇の志度崩御説が、ある誤りにもとずいてゐるのは疑いがない事實であり、その誤りのよつて來たところを指摘したのは、蒲生君平であつた。

この『山陵志』の著者は、寛政十二年の夏、白峯陵に詣で、したしく『白峯寺緣起』を披見し、白峯寺の住職と語りあつて、その結果、『白峯緣記跋』なるものに筆を染め、この寺にのこした。卷物一卷、白峯寺の寺寶となつてゐる。紹介のために、その全文を掲げておく。

#### 白峯緣記跋

以天子之尊不能終九重之內卒使孤墳寂々乎荒陬僻海豈可勝歎乎雖然生孰無死弔反可慶其已憂辱於一時所以見畏敬於千載也實山東草莽之臣常哀景聖山陵多就荒穢而不祀爲之再西遊以尋問其地則京畿之間所往莫不皆痛心惟曩如吉野今來此而獨觀陵寢巖然寺家守之不怠也如所謂問之水濱者哉宿於白峯寺與其住僧明公一夜談話聊寫憂也公爲實言曰崇徳之南狩也傳松山遂御野大夫高遠之所三年矣高遠之世即林田氏也其家至今不絕事尙存口碑後遷居甲知鄉鼓岡六年而崩焉是清少納言良賢所記爲然而甲知鄉舊國府所在今既失其名昔嘗公守於是邦也早公爲民祈雨於城山以必死出府故後人感其德政名與民訣處曰死出而鼓岡在其邊死出志度音相近小說以此謬作志度鼓岡然志度與府相距五六里決非鼓岡之地但世之傳誤非一日故今辨之也言畢因需識其由辭不獲乃題

寛政庚申夏

下野 蒲生秀實

（天下の尊を以てしても九重の内に終る能わず、ついに孤

墳をして荒陬僻海に寂々たらしむ、あに歎ずるにたうべ

けんや、然りといえども生孰か死なからん、弔かえつて慶すべく、その已に一時に憂辱せらるるは、千載に畏敬せらるる所以なり、實（蒲生秀實）は山東草莽の臣、常に累聖の山陵多く荒穢に就いて祀られざるを哀しみ、これがために再び西遊して其の地を尋ね問う、則ち京畿の間は往くところ皆痛心せざるなし、たださきに吉野にゆき今ここに來りてひとり陵寢の巖然として寺家これを守つて怠らざるを觀るなり、所謂これを水濱に問うものの如くならんや、白峯寺に宿し、その住僧明公と一夜談話していささか憂をのぞくなり、公、實のために言つて曰く、崇徳の南狩せらるるや、松山にいたり、ついに野大夫高遠の所に御すこと三年なり、高遠の世は即ち林田氏なり、その家いまに至るも絶えざることなお口碑に存す、後に甲知の郷鼓岡に遷居し、六年にして崩す、これ清少納言良賢の記す所にして然りとなす、而して甲知の郷は舊國府の所在、今はすでにその名を失う、昔嘗公この邦に守たるや早す、公、民のために雨を城山に祈り、必死を以て府を出でたり、故に後人その德政に感じて、民と訣れた處を名づけて死出という、而して鼓岡はその邊にあり、死出と志度は音相近し、小説ここを以て謬つて志度の鼓岡となす、然れども志度と府と相距たること五六里なり、決して鼓岡の地にあらず、但し世の誤りを傳うるは一日あらず、故に今これを辯ずるなり、と、言おわり、因りてその由を識さんことを需む、辭すれ

どもえざればすなわち題す

君平はここで、「死出」の鼓岡が、都人の耳に傳わつたとき、ボビュラーな「志度」と思ひあやまつて、「死出」を「志度」にしたと記しているが、首肯すべき説であらう。鼓岡のあるあたりは今日でも「四手」といい、すこし南には四手の池とよぶ池もある。これで志度の鼓岡が死出の鼓岡の誤りであることはあきらかにされ、弘化三年に出版された『金毘羅參詣名所圖會』でも「志度」に鼓が岡といへる地なし、志度といふは寒川郡、鼓が岡といへるは阿野郡にして其隔つる事凡八里の餘あり、原來志度に山寺もなしすべて海邊の平地なり、故に志度にて終に崩させ給ふといふは跡かたもなき空言なり」と、君平の説を繼承し敷衍している。問題を前にもどして、五部の大乘經を沈めたという「志戸の海」であるが、鼓岡附近の池や川を指して「海」といつたものでないことは、『保元物語』の「千尋の底」「海底」などの表現からも容易に推察されるであらう。すると、死出から北約一里ほどにあつた海岸を「シドの海」とでもいつたものであらうかとも思えるがその邊を「シドの海」と呼んだ記録や言い傳へはまつたかないようである。ここで注目すべきものが『白峯寺縁起』である。『白峯寺縁起』は、この部分を「椎途の海」としているが、そのはじめの方に「貞觀二年十月一日子刻に當國北條の郡大椎の興に撞出（大槌島とも書く）附近の海をさすのであるから、椎途の海は、大椎島とその南方ある小椎島との間の二軒あまりの海をいうのである。この島間の海はこの近邊では最も深いといわれている。そ

して、崇徳院が着御された松山の津からも程近く、雲井御所や鼓岡御所からも二三里の距離である。それあるか、大椎小椎の二島は經が島ともよばれている。

そうすると皮肉なものである。秋成がはたして「椎途の海」と知つて「志戸の海」としたのか、あるいはどこだかわからずに『保元物語』などから誘導されて「志戸」としたのか、または志度町のつもりで「志戸」としたのか、今日ではまったくその意圖を付度することが不可能であるにもかかわらず、後世の學者はやみくもにこれを志度町の海にきめてしまつたわけである。もし秋成にして志度町の海のもりであつたならば、こは秋成の誤謬を訂正するとともに、謬因を究明すればよいわけである。しかし、もしも秋成が志度町とはちがう場所の意味で志戸の文字を用いたとしたならば、攻撃と指彈の簡先はどちらへ向けたらよいのだろうか。このへんが註釋作業の心しなければならぬところであり、むづかしさである。

## 六、相模について

空にむかひて相模さかみと呼よせ給ふ、あと答へて、葦のごとく  
の化鳥翔あがり、前に伏ふて詔みことをまつ、院かの化鳥にむかひ給ひ

『白峯』で崇徳院と西行の間答が終りにちかずくころ、相模とよばれる化鳥が登場するが、この相模については、從來二説ある。その一は『南海通記』の「白峯相模坊は上古より南海道六箇國の天狗の司なり」や、謡曲「松山天狗」の「あの白峯の相模坊

にしたがふ天狗ども」「白峯に住んで年を経る相模坊とは我が事なり」をひいて、白峯に古くから住むといふ傳えられる天狗であると説く、他の一は『保元物語』卷一「新院御謀叛露顯並調伏の事」に、東三條の左大臣頼長の邸で三井寺の僧相模阿闍梨勝尊なるものが主上咒詛の秘法をおこない、それが露顯して義朝にとえられたことが記されているが、この相模勝尊であろうとする説である。ここでは兩説の當否はしばらくおいて、調査した事實の報告をしておく。

往古西向きの佛堂であつた崇徳院御廟の頓證寺殿が、現在みるような、左近櫻・右近橋をもつ京都御所風な南向きの神佛混淆樣式に建てなおされたのは、白峯寺の記録によれば延寶七・八年（一六七九・八〇）の交である。その當時は、中央に崇徳院の自畫と傳えられる肖像を安置した御本社、向つて右に本地佛の十一面觀音を安置し生母待賢門院の靈を祀つた大悲閣（觀音堂）、左に白峯山神相模坊の本像を安置した鎮守社相模坊が、合祀のかたちで祀られていたのであるが、明治初年の廢佛棄釋・神佛分離以後、いろいろの問題がおこつて、現在では、中央には代靈として崇徳院宸筆の六字名號が祀られ、向つて右には十一面觀音、左には相模坊大權現が祀られている。

そもそも相模坊大權現というのは『白峯寺縁起』に「同三日（貞觀二年）和尚（圓珍和尚すな）十峯山に攀登て瑞光を見給ふに彼山上に靈峯あり瑞光かの峯に通せり希有の思をなし給ふところに老翁一人現して云く吾は此山擁護の靈神爾は法輪弘道の聖者なり此峯は七佛法輪を轉慈尊入定の地也云々」とある、白峯山擁護の

靈神をさすのであるが、現にまつられている木像は天狗の山伏姿をかたどつたもので、兜巾鈴掛を装っている。この天狗姿は『保元物語』京師本・杉原本に、崇徳院が「生ナカラ大天狗ノ姿ニナラセ給フ」とあるのとは關係がないのであろうか。それにしてもこの山神がよりによつて「相模坊」という名で呼ばれるようになったのがいつの頃で、何に記されているのか、詳にしない。手許にある相模坊の資料はすべてこれ中世以降のものである。そこでつい相模坊の名稱の起りは白峯陵が築かれた以後のことではなからうかという憶測がでくる。そうだとすると、吉田東伍氏も『大日本地名辭書』で指摘されているが、崇徳院と因縁淺からざる相模勝尊の名がとられて白峯山の山神に相模坊の名がつけられた、と考えるのが妥當であらう。大方の御教示を俟ちたいところである。

#### 七、 おわりにかえて（参考圖錄解説）

『白峯』研究の杭打作業に使うべき杭はまだ幾本か残っているが、これは後日稿を改めることにして、ここでは私のこころみた基礎研究の背後をささえる参考圖の一部を掲げて、本稿のしめくくりとしたい。

〔第一圖〕安永五年刊『雨月物語』白峯の第一頁である。題名の『白峯』に「しらみね」のふりがなが附してあるのに注意されたい。この原本は安永五年刊の初版本であるが、『雨月物語』の刊本には異本はない。かつて徳本正俊氏は、その藏棄する文榮堂版の美濃版三冊本『雨月物語』が、安永五年刊の半紙版五冊本と

本文に若干語句用字の相異があると思ひこんで、あたかも美濃版三冊本が半紙版五冊本と板本が違ふかのように説かれたこともあったが、これは虚偽の妄説であつて、今日ではナンセンスな昔語りになつてゐる。『雨月物語』の原本には、安永五年刊の野村・梅村合版、後刷の野村・名倉合版、名倉・藤澤合版、文榮堂版等々、今日判明しているだけでも四版以上あるが、いずれも同じ板本を使用したもので、異版はまつたくない。

〔第二圖〕弘化三年刊『金毘羅參詣名所圖會』（美濃版）卷五にある「白峯本坊洞林院」の圖である。「しらみね」のふりがなに注意されたい。惣門・唐門・本坊・方丈のあたりは今日もこれと同じである。

〔第三圖〕『金毘羅參詣名所圖會』卷五にある、西行法師白峯陵に詣でるの圖である。御陵が雜草にうずもれ荒れはてている様が、想像ながらよくえがけている。當時を彷彿せしめるに足るものであらう。西行が笈を背負っているが、この笈を櫓の木にかけて詣拜したと『白峯寺縁起』に伝えられている。「第四圖」と比較されたい。

〔第四圖〕貞享四年刊『西行撰集抄』（半紙本）卷一の七「新院御墓白峯の事」にある挿繪。『西行撰集抄』は、本文も杜撰なものであるが、この挿繪などもひどいものである。よくよくみるとどこか町外れの寺にでもある墓地らしく見えるが、あわて者は、俳諧師みないな旅人が奥まつた厄住居かなにかを訪ねる圖であらうかと早合點しそうな構圖である。これでは土をもつた墳墓ではなく、石塔であり、周囲の有様も全然實狀とは違つてゐる。あま

りに近世的な繪で、素材をまったく知らない人の筆になつたものである。

〔第五圖〕西行腰掛石とその上に坐した西行の石像である。頓證寺殿に向つて左側の右近橋のうしろにある。石像の高さは二尺足らず、東向きになつてゐる。あまり古いものとは思えないが、弘化三年の『金毘羅參詣名所圖會』に「西行腰掛石 橋の樹の傍にあり石上に西行の石像を置り長凡一尺五寸餘坐像也」とあるから、近世からあつたものに相違ない。石像の首は十年程前に誰かのいたずらでとれたものだといふ。『白峯』で「終夜供養したてまつらばやと、御墓の前のたひらなる石の上に座をしめて、經文徐に誦しつつも、かつ哥よみたてまつる」とある石がこれだといわれている。眞偽の穿鑿は無用で野暮である。ほはえみをもつて背いていればそれでいい。

〔第六圖〕『金毘羅參詣名所圖會』卷五にある「白峯本堂、崇徳天皇御廟」の圖である。まず「しろみね」の振假名に目をとめられたい。この全體の構圖は、現在とはほとんど變つていない。頓證寺殿、觀音堂、本社、相模坊、左近櫻、右近橋、勅額門、金堂、行者堂、本堂、大師堂等々、位置も形も現在とはほぼ同じである。ただ御陵が、現在では必要以上にかめしくなり、石の玉垣を三重にしていること、第二次世界大戰中に御陵の前面の谷をうめて正面參道を築いたことが、この圖といちじるしく異つてゐるところである。

〔第七圖〕相模坊を背面から見たところ。神佛混淆時代の建物であるから、鎮守社として神社形式にしている。この中に相模坊

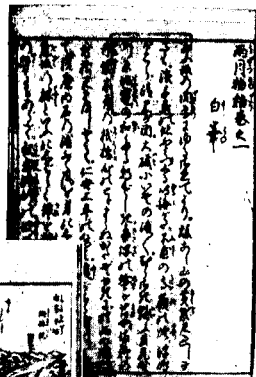
とよぶ山伏姿の天狗像が安置されている。

〔第八圖〕大椎・小椎の島をパスの中から見たところ、手前が小椎島、先にうかんではいるのが大椎島である。この島と島との間の海が「椎途の海」とよばれたところである。（この稿終り）

—一九五六・六・一五—

## 參 考 圖 錄

（第 二 圖）



（第一圖）



(第三圖)



(第四圖)



(第六圖)



(第七圖)



(第八圖)

(第五圖)

